



動物と出会い 人と触れ合っ 心のときめきをコーディネートするために — ZOO VOLUNTEER

円山動物園

ボランティア会

ふれあい・コンタクト

ニューズレター第56号 2013(平成 25)年 5 月 10 日発行 発行責任者:佐藤國男(代表世話役)

円山動物園ボランティア会 / 〒064-0959 札幌市中央区宮ヶ丘 3 札幌市円山動物園経営管理課気付 TEL(011)621-1426



平成 25 年度

定期総会

ボランティア活動開始式の後、今年度の定期総会が開かれました。

島津議長の下、前年度の活動報告、収支決算ならびに監査報告、新年度世話役承認の後、新年度について、活動計画、及び予算案が審議され、世話役会議の原案どおり承認されました。

最後に冬の間着用した防寒着の一括洗濯について要望が出されました。(直後の世話役会議で検討し、園にも打診しましたが、予備費を充当して洗濯することとなりました)



新年度登録 75 名体制

4 月 14 日 (日)、新年度登録証が見上園長から世話役代表を通じて各班に交付され、平成 25 年度の活動を開始しました。

園長の挨拶の後、動物園の新役職者の紹介があり、ボランティア担当も高田泰幸係長となり、前任者は飼育展示二係長へ転出しました。その後柴田課長の講演があり、開始式を終了しました。

新年度世話役

- (ふれあい) 小熊 瞳・松山幸子
- (クマチカ) カフマン弘美・
山川泰弘・堂前恵子
- (ワールド) 原 百合子・生出夏海
上田得一
- (ヤセイ) 初貝敏枝・佐藤國男
加藤啓子

飼育展示課 柴田課長の講演から



動物園基本計画も後半に入り、見直しをした。
動物園を“円山エリアの中核施設”として位置づけ、
これからの園経営に活かして行くために、情報発信
を積極的に行う。
施設設備としてはより多くの皆さんに動物に会いに
来てもらうために、施設の充実・展示方法の改善（エ
ンリッチメント重視）・心を伝えるガイド・ドキドキ
体験の充実等を通して、『おもてなし日本一』を目指
す。との内容でした。

ガイドボランティアのための

コミュニケーション研修

期日 平成 25 年 3 月 2～4 日、
講師 北海道医療大学臨床福祉学科准教授

長谷川聡先生

お客様との良好なコミュニ
ケーションを築くことを目
的として、研修会を開催しま
した。

講師は上記の長谷川聡先生
にお願いし、約 2 時間、演習
も含めた講義をしていただ
きました。

【研修内容】

- 1, オープンマインド
 - ① 心を開く
 - ② 自己開示
 - ③ 身体を開くと心が開く
 - ④ 身体の半緊張、反脱力
- 2, 受容と共感が信頼を築く（信頼に根差す関係が相手の受容力と理解力を引き出す。）



- 3, 声かけの技術
 - ① 自分のことを話す
 - ② 話題を持ち出す
 - ③ すぐに立ち去る
 - ④ 声かけを繰り返す
- 4, 動機付けの技術
 - ① 誘って待つ
 - ② 一緒にやる
 - ③ ちょっとやる
 - ④ また誘う
- 5, 一往復半のコミュニケーション＝もう一声かけ
る
- 6, コミュニケーション演習

以上の研修には3日間で70名以上のボランティアの
皆さんが参加くださり、これまで何気なくやってい
たお客様とのコミュニケーションについて、『もしか
したらこうした方が良かったのかも』という“気付
き”を得ていただくことができたのではないかと思
います。

特に印象に残っているのは『ボランティアの皆さん
は動物園内にいるときは、それぞれ“個人”ではな
く“ガイドボランティア”という役を演じなければ
なりません。役を演じている最中に“演じることを
忘れる”、“素が出る”のは大根役者といえます。』と
いう言葉です。

言われてみれば、私も動物園にいるときは“動物園
の職員”として振舞うよう心がけていますが、何か
あると、一瞬、素が出てしまうことがあります。

これまでのところ、幸いにしてそのことが原因での
失敗というのはありませんが、言われてみれば、そ
の瞬間は職員であるという意識がすっぱり抜け落ち
ているわけで、失敗直前の状態ということになりま
す。

先生のお話を聞き、相手がおお客様であっても同僚
であっても、動物園という場で仕事をしている以上は、
動物園職員であるということを常に頭の片隅におい
て振舞わなければならないなど改めて感じました。

皆さんも先生のお話を聴いて、“はっ”と気付かされ
たことがあるのではないかと思います。

今回の研修が、お客様との楽しい時間を過ごすため
に、どんなことに気を付けなければいけないのか気
付くよききっかけになったことと思います。

(係長 石橋 佑規)

キーパーさん紹介

エゾシカ・海獣担当 福嶋 一也さん



「動物園に
来て丁度1年
になりました。
動物園への転
勤を希望した
のは、同じ清
掃事務所で動
物園に勤めら

れた先輩から、やりがいのある職場だと聞かされたからで、知識もほとんど無く、道内出身なのにアザラシが北海道で見られると知ったのは動物園に来てからです。」と正直に打ち明けてくれました。

(Q1) それでは動物園に来て大変だったのでは？

(A1) 沢山知らない事があり、それを調べたり覚えたりが楽しく、やりがいを感じます。お客さんの多くは、かつて自分がそうであったように野生動物についての知識は余り無いと思うので、ドキドキタイム「エゾシカのエサやり」では難しい話はせずに、見た通りの動物の姿を材料に取り上げる。例えば「エゾシカの角は何のためにあるの＝それは外敵と戦うためではなく、メスを獲得するためだよ。立派な角を持っているとメスにもてるよ。」と言うと、エゾシカに興味や親しみを増してくれる感じが感じられます。

(Q2) 仕事で一番難しいのは何ですか？

(A2) 動物の健康状態の把握です。この1年、アザラシの死亡が相次ぎました。ショックでした。病気が進行してしまってから気が付いても、回復は難しいので、チョットした変化を見逃さず早く気が付くようにならなければ、と思います。

(Q3) エサやりで気を付けることは？

(A3) アザラシたちは意外に臆病です。何かが風に動かされる音に対しても警戒するぐらいです。死亡や早産死が相次ぎ、何度も獣医さんや大勢の人が放飼場に入ったりしたせいか、『ジージー』も『チハル』も用心深くなり、エサを陸上から水中に引き込んで食べるようになってしまいました。エサの入ったバケツも急に動かしたりせず、ストレスを与えないよう注意しています。

(Q4) 担当動物の面白い話等ありますか？

(A4) エゾシカのオス同士で、食事の時は『メグム』が『アユミ』より強いが、頭突きでは『アユミ』も頑

張ります。また、触っても平気な個体もいれば、いやがる個体もいます。

(Q5) アザラシについてお客さんに伝えたいことは？

(A5) どんなどころに住んでいるか、とか泳ぎ方の特長などです。喜ばれるのは体脂肪の話です。アザラシは40～50%、厚さにして5～10cmもあります。体脂肪が多いと思われるブタは意外や14～15%です。

(Q6) ボランティアに要望することは？

(A6) ガーデニングに詳しいボランティアさんはいませんか？動物園には花が少ないので、もっと花壇を整備し、季節の花や植物を植えれば、動物だけでなく季節毎に花や緑も楽しめる園として魅力アップし、リピーターも増えるのではと思います。やってみたいです。詳しい方がいれば、教えて欲しいです。(意外なお答えでした)

(Q7) これからやりたい事はどんな事ですか？

(A7) 動物の本来の生息地に似せた飼育環境を演出する事です。例えば、エゾシカ舎の周りを植栽などで工夫したいです。

違う職場から来られて1年のフレッシュな感覚、見方で動物園を更に発展させる事を考えておられるのだな、ということでした。

取材に快くお付き合いいただき有難うございました。

(クマチカ班 三浦千代美、山川泰弘)

『レディ』が教えてくれたこと

講師 祐川 猛飼育員

平成25年2月28日、南区民センターで、祐川さんによる、標記の講演が南区元気なまちづくり支援事業として行われました。

祐川さんはチンパンジー『レディ』の育ての親として『レディ』の成長過程について、群れとの関係・個体の成長について逐一説明してくださいました。そして、群れが『レディ』を受け容れることによって全体の育児力が向上したとのことでした。

また、飼育員の交代についても、いつも『レディ』を応援してくださるお客様の一部には不評だったようですが、祐川さんの姿が見えると、レディが甘えて、群れになじまなくなったり、他のメンバーが嫉妬したりすることがあって、群れ復帰が遅れることを懸念した。とのことでした。

『スオウ』の死を偲んで

2月9日、アジアゾーンで飼育されていたクロザルの『スオウ』が死亡しました。モンキーハウスにいたときから見守っていただけに心が痛みます。



円山に来たばかりの頃はまだ子供で、メスの『ガーネット』よりも小さく、お客様からは「親子ですか」とよく聞かれたものです。

大人になり、体も大きくなって『ガーネット』を追い越し、新しいアジアゾーンへと移り、環境にも慣れてきた矢先の出来事でした。子孫を残せなかったのは残念ですが、楽しい思い出を沢山残してくれました。

(やせい班 成田 愛)



訃報

当ボランティア会の設立に力を注がれ、初代の世話役代表であった木暮久人さんが、去る4月8日お亡くなりになりました。昨年度途中で、月4回の活動ができなくなったので、ボランティアを辞めたいと申し出ていましたが、園で当会の設立当初を知る人々から慰留され、昨年度中は登録を続けていましたが、今年度は登録を辞退されていました。その陰には「頭だけの考えにとどまり、手足が動かず、口だけが働いている状態では、活動の弊害になる」という信念が働いていたのだと思われます。長い間肺気腫を患い、何度か入退院を繰り返していらっしゃいました。活動日にもゆっくり歩くなどしていらっしゃいましたが、最期は肺炎による死だったそうです。

ご冥福をお祈りします。



親子の風景 エランド・ホッキョクグマ

